

テレビ番組が増幅させる 血液型差別

聖徳大学人文学部心理学科講師

山岡重行 (やまおか しげゆき)

Profile — 山岡重行

1990年、立教大学大学院博士後期課程心理学専攻単位取得満期退学。聖徳大学人文学部児童学科専任講師を経て、2006年から現職。博士（心理学）。専門は社会心理学（ユニーケネス、自己制御、血液型差別、ダメ恋愛の心理）。主な著書は、『ダメな大人にならないための心理学』（単著、ブレン出版）、『ダメラバ恋愛講座：知って得するラブセオリー』（単著、河出書房新社）、『サイコ・ナビ心理学案内』（編著、ブレン出版）など。



ある特定の身体的特徴をもつ人々を否定的に扱うことは明らかな差別である。血液型は本人の意志で選択できない身体的特徴の一つである。したがって、血液型で他者を否定的に扱うことは差別なのである。そもそも血液型と人間の特性を最初に関連づけた目的は人種差別だった。1910年代、ハイデルベルグ大学のデュンゲルンはドイツ人とドイツ在住の外国人の血液型、さまざまな動物の血液型を調べ、「東洋人は白人よりもB型が多い、チンパンジー以外の動物にはB型が多い、東洋人は白人よりも劣り動物に近い」と主張し、人種差別の根拠にしたのである。血液型性格関連説の歴史に関しては大村（1998）を参照されたい。

筆者は大学生を対象に、血液型性格判断に関する調査を1999年から断続的に行っている。1999年は週刊誌などの関連記事も減り、書店の本棚から関連コーナーも消え、血液型性格判断ブームは終局を迎えたように思われる状況だった（白佐, 1999）。ところが、2004年には1年間で約70本もの血液型性格関連説に関するテレビ番組が放送された（上村・サトウ, 2006）。同年12月に放送倫理・番組向上機構は「血液型で人を分類、価値付けするような考え方は社会的差別に通じる危険がある」と、各テレビ局にバラエティー番組で血液型性格を扱わないよう要望書を出した。2007年9月には『B型自分の説明書』（文芸社）が出版されシリーズ累計540万部のベストセラーになり、2008年に

は血液型性格関連本が多数出版された。血液型性格判断はこのようにブームと鎮静化を繰り返し、日本社会に定着してきた。それは各血液型のイメージを定着させ、偏見と差別を生み出している。本稿は血液型イメージと偏見・差別の関係について報告するものである。

方法

調査対象者に「自分と相性が悪い血液型・嫌いな血液型」を「A・B・O・AB・無し」の5つの中から選択させた。次に、各血液型性格のイメージをもっている者（ $N=2178$ ）に、「0：とてもイメージが悪い～10：とてもイメージがよい」の11件法でイメージの良さを評定させた。血液型性格判断による「何らかのいやな思い・不快な経験」をしたことがあるか尋ね、不快な経験をしたことがある者にはその内容の記述を求めた。

調査対象者 首都圏私立大学5校の男女大学生3587名（男性1342名、女性2242名、不明3名）。

手続 通常の授業時間の一部を利用し質問紙調査を行った。調査は1999年4月（ $N=1300$ ）、2005年5月（ $N=1362$ ）、2009年4月（ $N=925$ ）に行った。

結果と考察

調査年ごとの各血液型のイメージ得点を図1に示した。血液型と調査年の2元配置分散分析の結果、血液型の主効果（ $F=68.154, df=1/2175$ 、

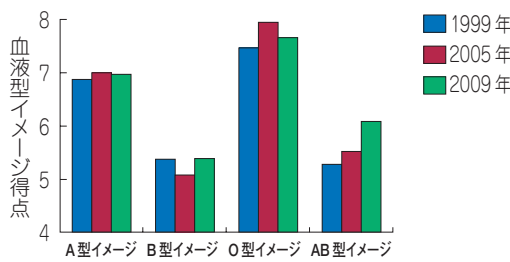


図1 各血液型のイメージ得点の変化

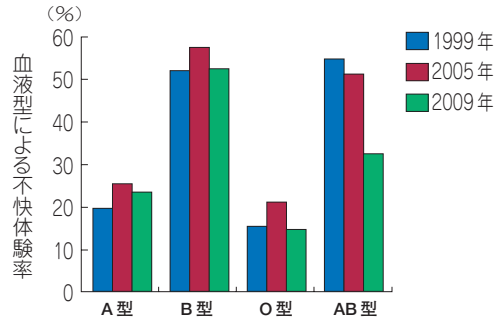


図2 血液型性格に由来する不快体験率

$p<.001$), 調査年の主効果 ($F=7.234, df=2/2175, p<.003$), 血液型と調査年の交互作用 ($F=11.365, df=2/2175, p<.001$) が認められた¹。多数派のA型O型と比較すると少数派のB型AB型のイメージがかなり悪い。交互作用から、A型のイメージは変わらないが、B型は2005年が最も悪く、O型は2005年が最も良く、AB型は次第にイメージが良くなっていることがわかる。

血液型性格判断のため不快な経験をしたことがあると答えた調査年ごとの各血液型の回答者の割合を図2に示した。B型AB型の不快体験率はO型A型よりも明らかに高いことがわかる。図1と対応させると、最もイメージが良いO型は最も不快体験率が低く、最もイメージが悪いB型は最も不快体験率が高くなっており、血液型性格のイメージが悪くなれば血液型性格に由来する不快体験率が高くなるといえる。B型のイメージが最も悪かった2005年にはB型の不快体験率が最も高くなり、AB型のイメージが次第に良くなるにつれてAB型の不快体験率が低下するというように、とくにB型とAB

型で血液型性格イメージと不快体験率がきれいに対応している。

全不快体験者1107名中1003名が不快体験の内容を記述してくれた。この回答は自由記述であり回答欄が制限されていたため、複数の不快体験をしている場合は回答者にとって最も不快だった体験を記述したものと考えられる。この自由記述の内容について筆者が分類したものを表1に示した。

最も多かったのは「不快発言」である。この内容であるが、B型とAB型は「不快なことを言われた」「バカにされた」「悪印象をもたれた」という回答がほとんどだった。それに対してA型とO型では、「自分の血液型に見えない、別の血液型に見えると言われた」という回答がめだった。A型は不快発言体験者100名中60名が、O型は63名中21名がこの回答だった。これはA型とO型のイメージが良いため、「A型あるいはO型に見えない」と言われたことが不快経験とされたのである。

不快体験で次に多かったものが「差別・苛め」である。これは「血液型のために差別された」

表1 血液型性格判断による不快経験の内容と報告者の人数

	A型	B型	O型	AB型	全体
マスコミ情報が不快	24(7.7)	32(7.2)	14(7.6)	5(3.1)	75(6.8)
不快発言	100(31.9)	155(34.7)	63(34.1)	61(37.7)	379(34.2)
☆型嫌悪	39(12.5)	5(1.1)	20(10.8)	4(2.5)	68(6.1)
性格の決めつけ	82(26.2)	36(8.1)	44(23.8)	21(13.0)	183(16.5)
差別・苛め	19(6.1)	158(35.3)	22(11.9)	51(31.5)	250(22.6)
その他	10(3.2)	24(5.4)	7(3.8)	7(4.3)	48(4.3)
不快体験報告者 計	274(87.5)	410(91.7)	170(91.9)	149(92.0)	1003(90.6)
不快体験者 計	313(100)	447(100)	185(100)	162(100)	1107(100)

(括弧内は報告者の割合)

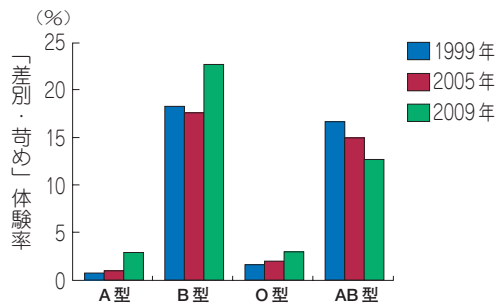


図3 血液型に関連した「差別・苛め」体験者の割合

テレビ番組が増幅させる血液型差別

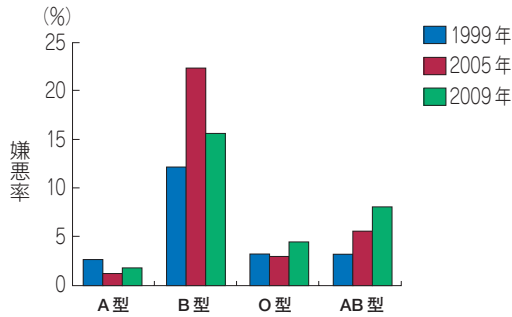


図4 A型嫌悪者の割合

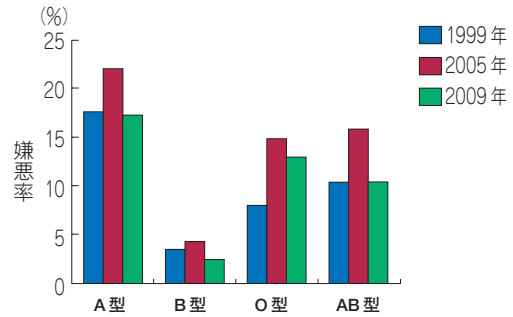


図5 B型嫌悪者の割合

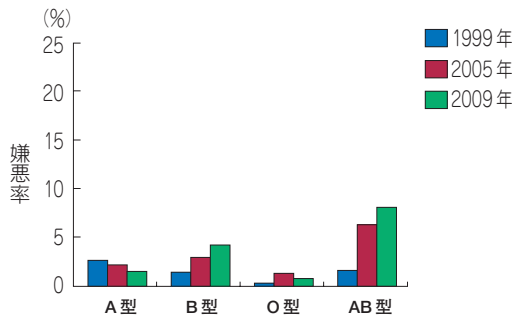


図6 O型嫌悪者の割合

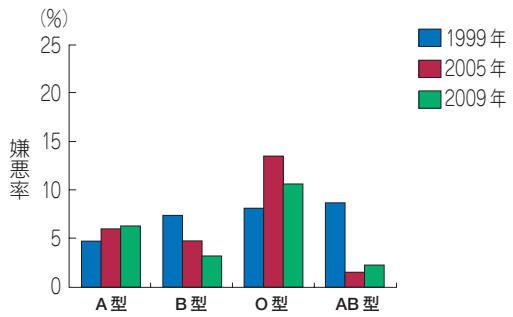


図7 AB型嫌悪者の割合

「いじめられた」「偏見をもたれた」「嫌われた」「仲が悪くなった」などの対人関係を悪化させる不快体験である。各年・各型の全回答者に占める「差別・苛め」体験者の割合を図3に示した。図2と比較すると、B型AB型とO型A型の差が図3ではより顕著になっている。血液型性格に関連した会話の中で、イメージの良いA型やO型でも短所を指摘されたりからかわれたりして不快な思いをすることはあっても、対人関係を悪化させる「差別・苛め」にはほとんどならない。しかしB型とAB型では、からかいのレベルを超えて差別やいじめと認識される悪質な言動が多くなるのである。また、AB型ではイメージの向上に伴い減少傾向が見られるが、B型では「差別・苛め」が増加している。

「自分と相性が悪い血液型・嫌いな血液型」では、「無し」を選択した者が全体の72パーセントで最多だった。「無し」以外の各血液型の選択率を血液型別に図4～図7に示した。

嫌いな血液型で特筆すべきはB型とA型である。B型を選択した者がB型以外では最も多く、とくにA型に顕著である。逆にB型では

A型を選択した者が最も多かった。さらにB型以外のB型嫌悪率、B型のA型嫌悪率は共に2005年が最も高くなっている。また2005年にはAB型以外の不快体験率も最も高くなっている(図2)。2005年のこれらの反応の原因は、2004年に集中的に放送された血液型性格判断関連のテレビ番組以外には考えられない。

90年代の初めはAB型のイメージが最も悪かった(上瀬・松井, 1991; 佐藤・宮崎・渡邊, 1991)が、現在ではB型よりもイメージが良くなった。これは90年代後半から「AB型は天才型」という言葉が使われるようになったためである。AB型の特徴とされていた「変人」を「天才」と言い換えたものと推測されるが、この「天才」という言葉がもつ肯定的な意味合いがAB型のイメージを向上させたのである。

2004年の多くのテレビ番組で否定的な扱いが際立ったのがB型である。例えば「発掘! あるある大事典II」(4月4日フジテレビ系列)では「B型にひどい目にあったA型被害者の会」, 「脳力探険クイズ! ホムクル」(6月5日TBS系列)では「B型男性と交際歴がある

怒れる女性 30 人」といった人たちが、いかに B 型の相手にひどい目にあったかを訴えるコーナーがあった。これらの番組で B 型以外の血液型の相手から受けた被害を訴えるコーナーは存在しなかったのである。

「超スパスパ人間学！」(10月7日 TBS 系列)では、幼稚園の先生がケーキが入っている箱を園児たちがいる部屋に置いて「先生が帰ってくるまで食べちゃダメ」と言って退室し、各血液型の園児たちが先生の言いつけを守るかどうかを比較した。A・O・AB 型の園児たちは言いつけを守り食べなかったが、B 型の園児たちはケーキを食べてしまった。このケーキを食べた園児の一人が筆者の友人 K 氏の親族だった(以下 K 氏の許諾を得て掲載)。K 氏がこの園児に何でケーキを食べたのか尋ねたところ、「だって、カメラを持ったお兄ちゃんがずっと『ケーキ食べちゃいなよ』って言ってたんだもん！」と答えたそうである。さらに、この園児は B 型ではなかった。この番組の制作スタッフは「先生の言いつけに従わずにケーキを食べってしまう園児の映像」が欲しかったのであり、それを「B 型の性格が反映された行動」として放送したのである。

また 2004 年の多くのテレビ番組では、望ましくない性格特性をもつ者として B 型を描くだけでなく、他の血液型(とくに日本人最多の A 型)と相性が悪い血液型としていた。これらのヤラセ、でっち上げを含んだ演出が B 型のイメージを悪化させ差別を増幅したのである。

血液型性格判断に関して 2005 年は前年のテレビ番組の影響が、2009 年は前年の書籍のヒットの影響が残っている状態だった。2009 年の調査で血液型性格関連の書籍を全く読まなかった者は全体の 37.3 パーセントだったが、2005 年の調査では前年の血液型性格関連のテレビ番組を全く見なかった者は全体の 17.4 パーセントにすぎなかった。このことから書籍よりもテレビ番組のほうが影響を与える範囲が広いことがわかる。

山岡(2001, 2006)が報告しているように、血液型性格判断はマスコミ情報に影響された思

い込み、根拠をもたない俗信であり、差別をつくり出す有害なものである。筆者が 2001 年 4 月～2005 年 1 月に行った調査(N=3075)で、「差別された」「嫌われた」「バカにされた」「誰かと仲が悪くなった」「性格を決めつけられた」「血液型を人に言うのがいやだった」などの不快経験で B 型が他の血液型よりも統計的有意に頻度が高かったことも報告しておく。差別の道具として血液型を使用した人種差別主義者の意図は、このようにして 100 年後の日本で「血液型差別」として結実したのである。

血液型性格関連説肯定情報を発信することは、差別を増幅する行為である。テレビはマスメディアの中でも差別の増幅効果がとくに強い。したがって、血液型性格を肯定するテレビ番組を放送することは害悪なのである。

-
- 1 主効果とは、例えば本稿では血液型という一つの要因によってイメージ得点の平均値が統計的有意に異なることであり、交互作用は血液型と調査年の二つの要因により同様に異なることである。

文 献

- 上瀬由美子・松井豊(1991)「血液型ステレオタイプの機能と感情的側面」『日本社会心理学会第 32 回大会発表論文集』296-299.
- 大村政男(1998)『血液型と性格』新訂, 福村出版
- 佐藤達哉・宮崎さおり・渡邊芳之(1991)「血液型性格関連説に関する検討(3)ステレオタイプから偏見へ」『日本発達心理学会第 2 回大会発表論文集』147.
- 白佐俊憲(1999)「血液型性格判断の妥当性の検討(2)」『北海道女子短期大学部研究紀要』36.
- 上村晃弘・サトウタツヤ(2006)「疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性」『パーソナリティ研究』15, 33-47.
- 山岡重行(2001)「血液型性格診断に見るダメな大人の思考法: 思い込みと勘違いのメカニズム」『ダメな大人にならないための心理学』ブレーン出版 pp.33-73.
- 山岡重行(2006)「血液型性格項目の自己認知に及ぼす TV 番組視聴の効果」『日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集』76-77.